

3. 猥褻論

エリス (Havelock Ellis) は現代イギリスの有名な優生学及び性の心理学者であり、また文明批評家でもある。著書の『新精神』 (The New Spirit) 一卷は、世界でも著名な文芸思想評論である。最近彼の『随感録』 (Impression and Comments 1914) を読んだ。いずれも芸術と人生に関する感想で、範囲はとても広いが、篇幅は長くはなく、豊かで深い思想を含んでいる。その長所は芸術と科学の二者を貫徹して融和できていて、そのため全てを理解し、偏りの弊害がないことである。いま彼の文芸上の猥褻を論じた文章を訳述し、彼の思想の健全さの一例とする。

“四月二十三日 (1913年)、わたしは今日 (新聞で) 判事ダーリンが双方の供述書を総括するときに陪審官に対して、「ラブレーの一章の本も読みきれなかったが死にそうなほど退屈しなかった」と言った。その言葉の意味はどうやらラブレーは猥褻な作家だと言うことであるらしい。その中の含蓄ということではその裁判官のように健全で端正かつ高等な心理から見れば、猥褻なものはただくだらなくしか感じられないと言うことであるようだ。

“わたしがこれを引くのは、決して異常な言行としてではなく、ただそれが実にその代表的見方であるからだ。確か小さい頃だったと思うが、一生懸命にマコーレイの論文を読んだことがあるが、そこでも似たような言葉を見つけた。似たような深意を含んだものではなかったけれども。そこでラブレーを買って来て、自分で調べて見て、ラブレーがなんと大哲学者であることを発見した。この発見は決してマコーレイから来たものではないので、わたしは自分独自のものと思っている。何年かしてたまたまコールリッジの議論が、ラブレーの驚くべき哲学の才能と優雅高尚な道徳に言及しているのを見つけて、わたしは自分が孤立しているのではないことが分かり、一種忘れ得ぬ喜びを感じたのであった。

“これはとても確かであるらしい。文芸に猥褻な分子が出現するとき、——言っておくが猥褻という言葉が色彩のない、学術的な意味で使われ、人生の普通では見られない面、いわゆる幕後の一面を表わし、決してなにか一定のよくない意味を含んでいない、——大半の読者にとってはたちまち彼の視野の全体を占拠する。読者はこれに対してあるものは喜びあるものは喜ばない、しかし彼の反応は非常に強烈なようである。もしイギリス人であれば特に甚だしく、彼の精神活動の全体を吸収してしまう。——「もしイギリス人であれば特に甚だしい」と言ったが、こうした傾向は普遍的だとはいえ、アングロサクソン人の心理では特に強い。「フランスの女優」ガービ・ドスリが言ったことがある。ロンドンの舞台では、単に楽しみを引きだそうとしただけの動作が、往々にして観客の非常に荘重な雰囲気しか得られず、非常に困惑した。「体にぴったりのパンタロンをはいて舞台上上がったとき、観衆はみんなほとんど息を止めたようだった！」——従ってそうした書籍は秘密に沈黙のうちに大事にされるのでなければ、大声で反対され罵詈雑言を被るかである。この反応は愚蒙な読者に限らない。それは普通の人間にも、また知識のある高等な人間にも影響し、時には偉大な文学者にまで影響する。この書物があるいは大哲学者の著書であって、彼の最も深い哲学が含まれるかもしれないとも、猥褻な言葉がそのなかに出ただけで、その言葉は各国の読者の注意を惹きつけてしまう。それでシェイクスピアは猥褻な作家とされ、必

ず削除を経なければならなかったし、あるいは今でもそう見なされている。われわれ端正で貞淑な現代の読者の耳には、猥褻な文句は実際に極めて少なく、せいぜい集めても一ページに過ぎないと思われるのだけれども。したがってかの聖書、キリスト教徒の天啓の書でさえ、合法的に猥褻と宣告される。それは合理的な判決かもしれない。なぜなら合理的な判決は必ず公衆の意見を代表しているはずだから。裁判官は合法的でなければならない。彼が公正かどうかにかかわりなく。

“われわれはよく分からない。これはどれだけ欠陥のある教育によるのか、従って改良することができるのか、あるいはどれだけ人間心理の根絶ができる傾向からでるものなのかが。猥褻の形式は当然時代によって変化する。それは毎日変化している。古代ローマ人が猥褻だと思いたくさんのことが、われわれからみれば別にそうではないし、われわれが猥褻だとする多くのことが、ローマ人が見ればわれわれを単純だと笑うであろう。しかし野蛮人にも時には原始的な善良な社会で言うてはならない猥褻なことばもある。とても厳密な礼法で、その礼法を犯せば即ち猥褻になる。ラブレーはその不朽の著作で、奇異で華麗な、確かに猥褻な生地を着物を着たので、そのためこの世に生きたことのある最大最高知の精神の一つが俗眼の面前から隠されてしまった。おそらく彼自身がそうあるよう望んだことであつたろうが。何時かある日、このように快活で勇敢にしかも深く人生をまるごと表し、また人生を甘美と考える人々の前に、普通の人がみな本能的にその影像を楽しみ、恭しく、たといひぎまづかないとしても、その神が彼に与えた特権を感謝するだろうと考えるのは、とても愉快なことだと思ふ。だが人間はまだ何時かきつとそうなるであろうと確信することはできない。”*

ガービ・ドスリの演芸については、エリスは〔1912年〕十月二十二日の条でとてもよい評論を書いている。パリ式の自由な芸術が、ロンドンに来て紳士達の干渉を経ると、悪化し、あれこれとかえって卑猥な色彩を加えられた。“この淫逸と端正貞淑との巧妙な混合の中には、不愉快で、苦痛にして人を墮落させるものが存在する。観衆がもし考えを働かせるなら、この普通の演芸の中で、彼らの感情が卑劣にも玩弄され、しかもなおその上侮辱的な予防措置を講ぜられたことを悟るであろう。これはただ精神病院にのみ適用されるものであって、当然自ら責任を負うことのできる男女に適用されるものではない。最後に、これは舞台上見るに如かず、そう、舞台での純粋な裸体なら、人を清浄高尚にする力がもっと出せるだろうと、思わざるを得ない。”この一節は偽道学が不道德な所以をよく説明できている。なぜならそうした反抗は実にとりもなおさず意志薄弱で誘惑を受け易いことの証拠であるから。エリスは極力こうした端正貞淑を排斥するが、これこそ彼の思想が健全なわけであり、『新思想』の中で極めてホイットマンに傾倒し、またそのため彼がラブレーと同じように快活勇敢にそして深く人生を全体的に示すことができるのである。アメリカでも猥褻と判決されその職をクビにされたけれども。

※初出：1923年2月1日『晨报副刊』

* Havelock Ellis Impressions and Comments. 1914. Constable and Company LTD. London. qout. 1913/4/23 pp. 133~136. 1912/10/12 pp. 34~35.